

京都大学	博士(文学)	氏名	山 崎 明日香
論文題目	リヒャルト・ヴァーグナー『トリスタンとイゾルデ』にみる 19 世紀ドイツの国民意識		
(論文内容の要旨) 近代ヨーロッパは国民国家形成の進展した時代である。この形成過程においては、政治的また民族的に固有の統一的な統治形態や、一つの国民的な基準を設定することが志向された。これに貢献したのが政治的また文化的なナショナリズムであった。この近代の国民を主体とする運動は、同一的で排他的な国民的な共同体の形成とそれに伴うナショナル・アイデンティティーの創出を目指していた。本論文の研究対象であるドイツの作曲家リヒャルト・ヴァーグナー (1813-83) は、まさにこのようなナショナリズムが高揚し、国民国家形成の進展した時代に活躍した。ヴァーグナーは、この近代的なイデオロギーのもとで、政治的また芸術的なナショナル・ユートピアの実現を模索した。これはヴァーグナーの中世の理想化や、彼の政治的また文化的装置としての国民的な祝祭構想に反映されている。ヴァーグナーは彼の祝祭を通じて、非日常的で神秘的な空間構築を目指しただけではなく、国民的で美的なアイデンティティーの構築を実現することを試みたのである。すなわち彼は、生涯を通じて自国の精神文化の醸成を図り、国民文化的な共同体の形成を志向した。そしてこのようなヴァーグナーのナショナリズムにおける創作活動は、彼のドイツの国民神話の創出過程であったとみなせるだろう。本論文は、ヴァーグナーが自ら台本を執筆した楽劇『トリスタンとイゾルデ』(1859、以下『トリスタン』と略記)を対象に、従来まで見過ごされてきた同作品に反映された 19 世紀ドイツの国民意識を検証する。さらにそれが国民的な共同体の形成と並行関係を成していた点を明らかにする。 第一章では、本作品の登場人物であるイゾルデ像に反映されている複合的な「アイリッシュ・オリエンタリズム」を検証する。このアイリッシュ・オリエンタリズムは、17 世紀以降のイングランドの植民地主義的また帝国主義的政策によって政治的また文化的に構築された否定的なアイルランド像である。ヴァーグナーの『トリスタン』の創作は、ドイツにおいて、「野蛮」かつ「植民地国」としてのアイルランドの表象が二極化した時期に相応した。イゾルデの「野蛮」な人物像も、このようなアイルランド表象の近代的な価値体系のもとで造形されている。そしてこの造形は、人為的に構築された演劇的なアイルランド人表象である「ステージ・アイリッシュ」に依拠していた。このステレオタイプな表象は、イングランドの通俗的な演劇作品や文学作品を通じて各国へと伝播し、19 世紀ドイツの文学作品においても浸透した表象である。さらにイゾルデの従属的な人物像は、同時代のドイツにおいてイングランドの属国として認知され始めた新しいアイルランド像を踏まえている。このイングランドに「抵抗す			

る」同国の表象は、ドイツの公共圏で形成された「アイルランド問題」に対する国民的な認識に基づいている。さらに、本作品で提示されたイゾルデ自身の多様な自己像にも注目できる。イゾルデは、同時代の宗主国と植民地国の関係図式を反映して、従属的で被抑圧的な人物として造形されている。このような、イゾルデに対する野蛮な人物という外的規定と、その内的意識に対する規定は、作品内の暴力的な支配構造を生み出すものである。『トリスタン』の「野蛮」かつ「従属的な」イゾルデ像は、同時代のイングランドとアイルランドの政治的な権力関係を反映していただけではなく、19世紀ドイツにおける、アイルランドの歴史的な表象変化と並行関係をなしていた。

第二章は、トリスタン像に反映されている同時代のイングランド表象を分析する。近代国家イングランドは、16世紀以来の積極的な植民地主義政策の拡大により、世界の覇権国として君臨しただけではなく、同国は19世紀を通じて高度な産業化を達成し、ヨーロッパ最大の政治と経済の中心国として成長した。この列強国家イングランドは、社会の軍国化の進展するドイツの諸領域に多大な影響を及ぼした。このような時代背景を考慮しながら、トリスタンの軍事的また帝国主義的な英雄像に注目する。この主人公像は同時代に浸透していたイングランドの国民的な英雄クロムウェル像に依拠している。この「文化的英雄」としてのクロムウェル像は、19世紀を通じて拡大したドイツの軍国主義的ナショナリズムのもとで受容された。さらに、このようなトリスタンの造形には、19世紀の海洋国家イングランド像との並行関係が認められるだろう。この「海を支配する」イングランド像を、ヴァーグナーは、イングランドの第二の国歌とも言うべき『ルール・ブリタニア』の受容を通じて認識していた。「海を支配する」トリスタンの暴力装置としての人物像は、このようなヴァーグナーの、時代に密着した創作活動において生み出されているのである。さらにトリスタンの文明的で野蛮な表象構築には、イングランドを否定的に捉えたドイツの国民的な認識が反映されている。すなわち、イングランドの世界的な覇権国としての国家像から、他国を弾圧する帝国主義的・植民地主義的政策を敷く野蛮な国家としての側面が、次第に強調され始めた事情が存在する。このように外国とその国民を制圧する軍人としてのトリスタンの新たな英雄像は、ドイツの軍国主義的風潮のもとで理想的に造形されていたのである。

第三章では、19世紀に再興されると共に、国民化と世俗化を遂げたバッハの『マタイ受難曲』(1727)からの『トリスタン』への影響を検証する。バッハの同作品は、ドイツの国民的また文化的な共同体形成のモデルとして国民意識に上った。受苦日の儀式のために創作されたこの受難曲は、大衆の宗教的空白を埋める市民的かつ世俗的な「礼拝の場」として機能していた。これに並行してとりわけ1850年代以降のヴァーグナーも、宗教的な作品を創作することに力を傾けていた。そして観客の感情を統制し、同質的で排他的な共同体の形成を促進するこのような宗教的な作品を創作することは、まさに彼の芸術的な試みに一致していたのである。バッハの『マタイ受難曲』の影響

は、まず『トリスタン』の登場人物の神秘化として表れる。これは、従来まで議論されてきた作品内の死薬のモチーフや沈黙の主題のみならず、イゾルデをイエス的な人物に見立てた場面において認められる。また、『マタイ受難曲』の敬虔主義的また感傷主義的な構想の影響は、『トリスタン』の恋人たちの関係性の聖化を導いている。これは、愛の抱擁の場面のみならず、神秘主義的な含意をもつ「甘美な」という形容詞の使用や、「安らぎ」の主題のなかで展開されている。さらに、トリスタンは「血と傷」の言説を用いて造形されているが、ここには『マタイ受難曲』の感傷主義的な受難の美学が反映されている。19世紀に進展した芸術の神聖化と儀礼化において、ヴァーグナーは、自身の救済思想を基盤に、『トリスタン』を近代のオラトリオ的な宗教的作品へと変貌させた。ここには作品の高い文化的価値を創造することだけではなく、その上演を通じた宗教的また文化的な精神共同体の構築が意図されていたのである。

第四章では、『トリスタン』における傷のモチーフを、同時代のキリスト教の傷の表象を手がかりに考察する。中世から近代にかけてのキリスト教におけるこのモチーフは、イエスの受難を通して、信者の信仰心を喚起する宗教的手段として重要視された。また近代の後期敬虔主義における傷の形象は、中世の伝統を踏襲しながら、同時代の国民意識を反映した宗教的で国民的な共同体創出のための美的装置として機能していた。『トリスタン』に導入された傷のモチーフも、観客の宗教的感情を高揚させ共同体の形成を導くこのような道具として機能している。これに関して注目できるのが、イゾルデの傷の治療と内面的な傷の形成である。彼女を聖母的な人物として提示するこの傷のモチーフは、同時代のマリア崇拜だけではなく、ヴァーグナーの受容した『スターバート・マーテル』の影響を受けている。また、中世の神秘思想から近代の後期敬虔主義へと継承された、伝統的な傷の礼賛の影響も考慮できるだろう。これは作品内で二人の神秘的合一を提示する傷のモチーフとして表れている。さらに本作品に見受けられる受難神秘主義的な愛の傷には、ヴァーグナーの実生活での官能的な傷の観念が反映されている。本作品の傷のモチーフは、恋人たちの背徳的な愛情関係を、神秘的で純粋な性質へと変容させている。この変容は、作品を同時代の市民社会の性秩序や道德観念に一致させることで、共同体を形成する新たな倫理的また美的な意識を生み出すことにつながった。

第五章では、18世紀半ばから改めて使用されるようになり、19世紀を通じて民族的・文化的・精神的・医学的な文脈で否定的に展開された概念「Entartung」を手がかりに、『トリスタン』の創作期におけるヴァーグナーのナショナリズムに対する関心から、彼の晩年の人種主義に対する関心への移行を検証する。ヴァーグナーの論考『ヴィーベルンゲン、伝説に発した世界史』（1848）における概念「Entartung」は、彼の後の楽劇『トリスタン』に現れる同概念と同様に、ある民族の歴史的衰退を表している。また、ヴァーグナーの後期の著作『ドイツの芸術と政治』（1867）においては、この概念が制度批判のレトリックとして用いられ、ドイツ芸術の再興を提唱することに貢献

している。そして同作曲家の晩年の「再生論文」においては、同概念が、ヴァーグナーの歴史哲学的・人類学的・人種主義的な人類再生のイデオロギーを支持する鍵概念として展開されている。ここにはヴァーグナーの受容した同時代の文化悲観主義のみならず、ダーウィンの生物学的進化論、グレースの生活改革運動、さらにゴビノーの人種主義的言説からの影響がそれぞれ見受けられる。19世紀における「Entartung」の概念変遷は、まさにナショナリズムから人種主義への大きな潮流と連動していたが、ヴァーグナーの『トリスタン』も、その影響を受けて創作されていたのである。

(論文審査の結果の要旨)

世界中の歌劇場において今日欠かすことのできない作品を数多く作曲したりヒャルト・ヴァーグナーは、台本を自ら執筆したうえ、著作も少なからず著したところから、音楽史の分野だけではなく、ドイツ文学研究の領域においても、重要な研究対象であり続けている。ヴァーグナーについてはさまざまな研究方向が見られる中で、近年特に盛んに論じられるようになってきたものとして、ヴァーグナーと同時代の19世紀ドイツの国民意識を彼の創作活動と関連させて捉えようとする動向が指摘できる。論者はそのような傾向の先行研究に十分留意し、ことにベルムバッハによる研究を踏まえ、論を展開しようとした。論の中心に据えられているのは『トリスタンとイゾルデ』である。通常ヴァーグナーの作品の中でも、国民意識とはことに縁遠いものとされているこの作品にあえて当該の問題を探ろうとした点で、本論文は大変意欲的な試みである。

全五章から成る本論文の第一章でまず取り上げられているのは、17世紀以降のイングランドの植民地主義的政策によって政治的また文化的に作りあげられた否定的なアイルランド像が、『トリスタンとイゾルデ』の主要登場人物の一人であるイゾルデにどのように投影されているかという問題である。この作品の中でイゾルデに対して投げかけられる歌詞や、イゾルデ自身が自らを規定する歌詞を詳細に検討したうえで、論者は、本作品においてイゾルデは、「野蛮」かつ「従属的な」女性として描かれていることを指摘し、そこにはイングランドとアイルランドの政治的な権力関係が反映されているだけではなく、19世紀のドイツにおいて見られたアイルランドについての表象の変化も読み取れるとしている。

第二章では、『トリスタンとイゾルデ』のもう一人の主要登場人物であるトリスタンに、19世紀ドイツにおけるイングランド表象がどのように反映されているかという問題が扱われている。論者はトリスタンが英雄として描かれていることに注目し、この主人公像にはクロムウェルのイメージが反映されているとし、舞台設定には、海洋国家としてのイングランド像も読み取れるとしている。さらに、軍人としての側面が強調されたトリスタンの新たな英雄像は、ドイツの軍国主義的風潮のもとで理想化された姿で造形されたものとみなされることも指摘している。

第三章では、バッハの『マタイ受難曲』が『トリスタンとイゾルデ』に及ぼした影響が検証されている。論者は、19世紀に再び盛んに演奏されるようになっていく過程において世俗化を遂げ国民的なものになっていった『マタイ受難曲』は、同質的な共同体形成を促進する宗教的作品の創作を目指していたヴァーグナーにとっても共通する傾向を有するものと受けとめられたとしたうえで、この二つの曲の歌詞の異同を詳細に検討した。その結果、『マタイ受難曲』からのモチーフの借用が少なからず見られることが判明した。『トリスタンとイゾルデ』は『マタイ受難曲』に通じる面を持つということはすでに指摘されていたことであるが、その点が本論文ほどに具体的に指

摘されたことはこれまでなかった。

第四章では、『トリスタンとイゾルデ』に見られる傷の表象が、中世から敬虔主義の時代を経て近代にいたるまでのキリスト教における傷の表象と比較されている。この作品の傷のモチーフは、恋人たちの背徳的な愛情関係を神秘的で純粋なものへ変容させたこととされ、その結果、この作品は市民社会の性秩序や道德観念に一致するものとなり、共同体を形成する新たな倫理的かつ美的な意識を生み出すことにつながったとされている。

最終章の第五章は、『トリスタンとイゾルデ』の中でイゾルデが自らの一族を „entartet“ と評する歌詞があることに着目し、 „Entartung“ という概念がヴァーグナーにあって変遷していく過程をたどったものである。一般的には「退廃」と訳されることが多いこの言葉が、ヴァーグナーにおいては当初、ある民族の歴史的衰退を表すものとして用いられ、最終的には人類再生という歴史哲学的な主張を支える用語として使われるようになるまでの過程が、数多くのヴァーグナー研究文献においてもこれまでになされなかったほどに克明に跡づけられている。

ヴァーグナーにおけるナショナリズムの問題を『トリスタンとイゾルデ』に即して論じるのは、この作品の題材が中世に端を発するものであり、作品の基本テーマも主人公二人の愛と死ということであるため、容易なことではない。それゆえ、トリスタンの像に19世紀ドイツのイングランド表象を読み取ろうとする章をはじめ、本論文の一部には論証が十分ではない箇所も見られる。しかし本論文を全体として見た場合、それを補って余りある結果が得られているのも確かである。ことに、歌詞の詳細な分析を通して示された、イゾルデに見られるアイルランド表象についての第一章での指摘、すでにその成果が日本独文学会の欧文誌でも公表されている、第三章の『トリスタンとイゾルデ』と『マタイ受難曲』の歌詞の比較などは、ヴァーグナー研究に資するところが大きいと思われる。論を展開するにあたっては、ヴァーグナー研究書のみならず、歴史や思想に関する研究書、さらにはヴァーグナー自身が影響を受けた19世紀の文献等、実に多くの文献や資料が参照されている。その労は多とするに値する。

このように本論文は高く評価できるものの、ドイツ語からの訳文に関してはさらに精緻な読解を要する箇所がわずかながら見られる。この点に関しては、論者の今後いっそうの努力を望みたい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2012年2月8日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。